

かはせて使ひ方の實地説明もしてくれたのだつた。

この人形の頭は、齋藤氏の本にも見えてゐる、大江宗七作の逸品とおぼしく、じつによく出来てゐる。寫眞で見ると文樂所藏（むろん焼けたと思はれるが）のも結構だが、瘦せて頬骨の高くなつてゐるぐあひ、島の生活で衰へ果て、それが海風に吹かれ日にやけて、物凄ゐ灰色になつてゐる容子といひ、どうもまさるとも劣らぬ逸品だといつていいやうである。先日もある外人（ハンガリーから來て、八年間も日本の古美術を研究した人）が館へやつてきた時、この景清の人形「大いに感服して「これはいい人形です、いい人形です」と立ちどまつてしまひ、行きかけては振り返り、心から感歎したのも無理はない。

幸ひに、此の景清は、第一着の疎開荷物に入れて長野縣の山の中まで行つてきたが、別段の損じもなかつた。大阪では文樂はじめ諸家の所藏品が、多數焼亡したことと思はれるが、門造氏の多數の蒐集品はどうなつたのだらうか。少しでも疎開さしてあつてくれたら、などと案じながらツイそのままに打ち過ぎてゐる。文樂東上のをりもあらば、門造氏の好意にたいしても、改めて敬意を表したいと思つてゐる次第である。

それにつけても、文樂人形の整理——戦災後の整理もどなたかしておいてほしい。さうして各地にある三人遣ひ人形も調べて、出來のよいものは目録としてでも所在を明らかにしておくか、博物館的に、適當に蒐集しておくやうにしたいものだ。（二一・一〇・一八）

おさんの涙

隨筆

森田たま

母の郷里淡路島は、人形淨りのさかなな土地で、そのため産を失ふ者もすくなくなつたさうであるが、母の父もその一人であつた。村で三番目とか云はれた家屋敷を手離して、北海道へわたるやうな破目になり、晩年は娘の縁家先きである私の家へ引きとられて暮してゐたが、祖父は淨りへの愛着を捨てゐる事なく、每晚一本のお仕着せに陶然として、大きなゐろり端で何かを一段語つてから休むのがきまりであつた。

三勝半七とか、玉手御前とか、八重垣姫とか、壺坂とか、初菊とか、子供の私は淨るりによつて、さまざま悲戀の物語をおぼえたが、中で一ばん好きだつたのは、阿漕ヶ浦平治住家ノ段といふので、時々それを注文して祖父に語つてもら

つた。いろ戀で泣いたりくどいたりするところのないのが、さつぱりして氣に入つたのであるかもしれない。私の十二三の頃は新派が全盛で、不如歸とか己ヶ罪とかいふ芝居が來ると、隣近所誘ひあはせて見に行つたが、たまにまはつてくる歌舞伎芝居でも、べつに退屈もせず見物してをられたのは、ひとへに祖父の淨るりのおかげであつた。

祖父の従兄弟が文樂の太夫になつてゐるとかいふ話で、祖父はそれが大の自慢であつた。したがつて私も、文樂の太夫といふのは、よほどえらい人であらうと思つてゐた。後年東京へ出て來て、大阪生れの夫と知りあひ、一度大阪へ文樂を見に行きたいと話すと、文樂なんて退屈なものですよと云はれて、私は何となくびつくりした。夫は日本のふい音曲をはじめとして、芝居、寄席、それから書畫骨董の類まですべてきらひであつた。伊太利やロシアの歌劇は何を措いても出かけたが、其他のものは決して行かうと云はなかつた。

新橋演舞場に文樂の出演があつて、夫につきあひをたのみ、見に行つたのはいつの年かはつきりしないが、なんでも季節は夏であつたやうに記憶してゐる。廊下で小宮先生に白眼にかかつた。さまざま有名な人がぞろぞろと歩いてゐて、私はそれに見惚れてゐるうち、ジョーゼットの紺のしぼりの單衣の肩に、煙草の火を落され、長じゆばんまでとほつて焼けこげの穴が出来てゐた。それほどに混んでゐたのである。おもへばあの頃は、文樂の全盛時代ともいふのではなかつたらうか。私はまだ筆の仕事などせず、平凡な家庭の主婦で

あつた。

時雨の炬燵を見たが、それは鴈治郎の派手な舞臺で馴染んでゐたものとは、すつかり趣きがかはつてゐて、こたつぶとんなども質素な、むしろしみつたれた感じのものであつた。人形も地味な縞ものを着てゐて、身のこなしも内輪につつましやかで、いかにもさびしく、女の悲しみが身にしみるやうにわびしかつた。がくりと疊に伏して泣いたおさんの姿が、いつまでも眼に残つて離れず、それから後はどんなに誘はれても、文樂へ行く氣がしなくなつた。おさんの悲しみはそれほど深く身にこたへた。

いくら訴へても訴へても救はれようのない、無限の悲しみが、なま身の俳優の場合にはそれ程迫つて感じられもしないのに、たましひのない人形の動きに、胸をえぐられるやうな痛みを感じたのはふしぎである。それが藝の力といふものかもしれないが、息のないものに息を吹きこむ力は、何となく無氣味にさへ思はれた。

先日、この百姓家へ小宮先生と中谷博士が見えられた時、中谷博士にスケッチして頂いた大阪の丁稚人形の畫に、小宮先生が賛をして下さつた。

泣け泣けと恨む女房も亥の子哉

咄差に私のあたまたに浮んだのは、見慣れた鴈治郎の舞臺ではなくて、地味な文樂の人形であつた。がくりと疊に突伏した、あのわびしいおさんの姿であつた。——新しい世の中となり、おさんの涙もかはく日がくるであらうか。